

イギリスのポリティカル・シアターとコソヴォ空爆反対運動

Howard Brenton, Harold Pinter, Caryl Churchill

金田迪子

Janelle Reinelt が *After Brecht* (1996) で述べたように、戦後イギリスのポリティカル・シアター (political theatre) は「アメリカにはないもの (what we haven't got at home)」(1) としてトランスアトランティックな観点からもイギリスに特徴的な文化の一つとして注目されてきた。本発表ではムーヴメントとしてのポリティカル・シアターがポスト冷戦期の左派の窮状に回答しつつ文化としての存続を模索してきた経緯を記述することを目的に、ポリティカル・シアターの劇作家とコソヴォ空爆反対運動との連関を検討した。¹

I イギリスのポリティカル・シアター：定義と問題

John Osborne の *Look Back in Anger* (1956) に端を発する「怒れる若者たち (Angry Young Men)」の文学・演劇・芸術の運動は、CND を含むニュー・レフト運動の影響を受け、政治的なアイデンティティを共有する劇作家がイギリスに登場した最初のムーヴメントとなった。Amelia Howe Kritzer はイギリスのポリティカル・シアターを、50年代以降、70年代のフェミニズムやゲイの権利運動、80年代の反サッチャリズムと、イギリス国内のアクティヴィズムと連動し関心を推移させてきた運動として定義している。

一方で Kritzer はニュー・レイバーの登場、冷戦の終結、90年代中盤の「イン・ヤー・フェイス・シアター (In-Yer-Face Theatre)」の登場等によりポリティカル・シアターは70年代の推進力を90年代には失ったとしている。だが本発表では Harold Pinter (1930-2008)、Howard Brenton (1942-)、Caryl Churchill (1938-) といった劇作家が90年代以降も積極的にアクティヴィズムに関わり作品を発表してきた事実から、90年代のポリティカル・シアターの系譜にも検討の余地があるのではないかと問いを立てた。

II イギリス人劇作家とコソヴォ空爆反対運動

1999年3月から6月にかけて、ユーゴスラヴィアのコソヴォ自治州におけるアルバニア系住民の迫害が加速する中で、国連による和平交渉に応じないミロシェヴィッチ政権に対し、NATO 軍は国連の承認を待たず空爆を開始した。トニー・ブレア首相を含む西側諸国の首脳の一部は軍事介入を支持したが、国連憲章への違反、民間人への誤爆、民間施設への攻撃対象の拡大、地上兵力の投入を行わない空爆に依存する作戦の遂行などをめぐり、その正当性について多くの疑問も提示された。イギリス国内においても空爆の是非を問う議論が世論に浸透し、Pinter、Brenton、Churchill らは投書等を通じて空爆反対の立場を表明した。

III Harold Pinter の運動：Against the War (1999)、空爆反対デモ、反戦詩

Guardian 紙での署名記事の掲載、コソヴォ空爆論集へのエッセイの寄稿、Labour CND の下部組織 Committee for the Peace in the Balkans 主催のデモ集会での演説、Channel 4 制作のドキュメンタリー番組 *Against the War* (1999) への出演等が知られる Harold Pinter は、コソヴォ空爆に反対する劇作家の中でもリーダーシップを発揮していた存在と言える。

Pinter の反戦詩集 *War* (2003) は、2001年の世界貿易センター同時多発テロ及びイラク戦争の勃発という文脈で出版されたが、本集収録の詩には、Pinter の反コソヴォ空爆論の特徴である、アメリカ政府の軍事行動と言語の虚構性の関係に対する関心が表現されている。Pinter は自身の空爆批判において、アメリカ政府の言語とアメリカ政府の行動の間に生じる“discrepancy” (“Foreword” viii) を非難し、第二次世界大戦後以降のアメリカ政府に対する“exercised a sustained, systematic and clinical manipulation of power” (viii) と呼びつつ、そこにおいて“masquerading a force for universal good” (viii) が行われてきたと糾弾したが、本集の反戦詩からはそれらの主張をなぞるようなアメリカとイギリスが行う言葉の濫用 (abuse) に対する分析を認めることができる。詩“Democracy”では、民主主義という語を冠した表題と卑俗な単語が羅列される本文とが対比され、詩“God Bless America”でも、第一節でアメリカ人達が“armoured parade”²に参加し“ballads of joy”と共に世界へと“gallop”する情景を展開しつつ、第二節以降は一転して“gutters are clogged with the dead”と戦場の風景を提示し、第三節では“Your head rolls onto the sand,” “Your head is a pool in the dirt,” “Your head is a stain in the dust”と暴力の客体になることを読み手に強制する。また“The Bombs”では“All we have left are the bombs”というリフレインを通して空爆の描写が行われるが、この表現は2002年にPinterが用いたアメリカ軍によるイラクに対する軍事行動を指した表現“Bombs are its only vocabulary”と重なり、政府の操る言語と実際の軍事行動の「不一致」への関心との連続性が見られる。喜志哲雄は2000年以降のPinterが政治の言語を自らの言葉に対する強い関心に基つきながら分析したことを指摘するが、コソヴォ空爆をめぐるPinterの発言もまた「言語的頹廢」(220)に対するPinterの関心を表していると言える。これらの関連からは、Pinterにとってのコソヴォ空爆反対運動が戦後の反戦運動という文脈に位置付けられ、晩年のノーベル賞受賞までにPinterが先鋭化させていった反イラク戦争の言説を完成させる過程であったことも考えられる。

IV Tariq Ali と Howard Brenton : Stigma と *Collateral Damage* (1999)

Howard Brenton、*New Left Review* の編集者の一人である活動家の Tariq Ali、演出家の Andy De La Tour と結成した演劇団体 Stigma は 1998 年から 2000 年にかけてブレア政権に対する風刺劇を発表したが、その一つが Kosovo 空爆をめぐるロンドンのリベラルな中年夫婦の口論を描いた *Collateral Damage* (1999) となる。

夫婦 Daniel と Leonie の会話は、同時代の反空爆論の論点を忠実に演劇化している。反対派の Leonie はベオグラードのテレビ局への空爆や中国大使館への誤爆のような当時反対派の主要な論拠の一つとして用いられた軍事行動による犠牲の拡大の問題を指摘し、賛成派の Daniel は“democracy” (16) “human rights” (17) “just war” (17) 等の空爆支持の言説のキーワードを用いて空爆を擁護する。また Daniel は空爆反対論を“anti-Americanism” (23) とみなしつつ冷戦構造に結びつけ、Leonie を“You still think you’re in CND” (18) と反ヴェトナム戦争運動と同様の感覚で “[w]e hate war” (18) を唱えているだけだと批判する他、“Communism’s dead, we’ve got to get out of the cold war mindset” (23) と旧来の左派のイデオロギーの枠組みで思考停止的に空爆に反対していると主張する。

Ali は空爆を肯定するリベラル派を“keen warmongers” (353) と糾弾し、メディアによる報道への感情的な反応から軍事行動が必須であると訴えるリベラル派を“The Europe that is backing the American war in Serbia is the liberal, social-democratic half of the continent” (353) と非難する。Daniel と Leonie の対立は Kosovo 空爆をめぐるリベラルな左派の内部での対立を観客に提示する存在と言える。

V Caryl Churchill : 反空爆論と *Far Away* (2000)

Caryl Churchill の *Far Away* (2000) はその高い抽象性から、環境破壊、全体主義、テロとの戦い等、様々なグローバルな脅威への警告として読まれてきたが、本発表では 90 年代後半に Churchill が Pinter や Brenton らと共に反空爆運動に積極的に参加していたこと等を考慮し、反空爆論との関連から読みを試みた。

Far Away の第一幕で少女 Joan が言及する、お婆の Harper の家の庭に停まっている「トラック (lorry)」 (137) の中から人間の叫び声が聴こえてくるという光景は、同時代の Kosovo 空爆を特集する報道番組で頻繁に用いられた「トラックの荷台に乗る難民」の図像を髣髴とさせる。この図像は NATO による民間人の誤射の報道や、ユダヤ人強制収容所に関するトラウマ的な記憶とも結びつきつつ、空爆の象徴として賛成・反対の両方の文脈で用いられてきた。

またおじが“lorry”に乗っている人間たちを殴る場面を見たと言う Joan を“you’re part of a big movement now to make things better” (142) と説き伏せ、“I’m on the side of the people who are putting things right” (142) という Harper の主張には、Brenton が Daniel を通して集約した空爆賛成派やトニー・ブレアの主張が重なる。Slavoj Žižek は Kosovo 空爆作戦において「人権」や「人道的介入」という語を用いた軍事行動の正当化が行われることにより対抗的言説の形成が困難となる様を“moralistic depoliticization” (34) と危険視したが、Pinter がアメリカの言語の“discrepancy”という形で糾弾し、Ali が“keen warmongers”への怒りとして表明した正当化への危惧は、*Far Away* においては Harper の自己正当化の形で現れている。

VI 結論：再編と反復

本発表では、1990 年代のイギリスのポリティカル・シアターの劇作家が、Kosovo 空爆反対運動を核武装反対運動や反サッチャリズムに代わる共通の理念として共有しイデオロギー的な再編を図りつつ、50 年代、60 年代の反戦の言説を反復することでその存続を図ってきた過程を示した。

註

- 1) 本研究は科学研究費 2020 年度研究活動スタート支援「キャリル・チャーチル後期作品とユーゴスラヴィア空爆反対運動との連関」(課題番号 20K21992) の助成を受けて進められた。
- 2) 以下は *War* (2003) からの引用となるが、*War* にはページ番号が振られていないため頁数を省略する。

参考文献

- Ali, Tariq. “Nato’s Balkan Crusade.” *Master of the Universe?: NATO’s Balkan Crusade*. Edited by Tariq Ali. Verso, 2000. pp. 345-359.
- Ali, Tariq, Howard Brenton and Andy De La Tour. *Collateral Damage*, Oberon Books, 1998.
- Churchill, Caryl. *Plays: Four*, Nick Hern Books, 2014.
- Kritzer, Amelia Howe. *Political Theatre in Post-Thatcher Britain: New Writing: 1995-2005*, Palgrave Macmillan, 2008.
- Pinter, Harold. “Foreword.” *Degraded Capability: The Media and the Kosovo Crisis*, Pluto Press, 2000. pp. vii-x.
- . *War*, Faber and Faber, 2003.
- Reinelt, Janelle. *After Brecht: British Epic Theater*, Michigan UP, 1996.
- Žižek, Slavoj. “NATO as God’s Left Hand.” *Law, Justice and Power: Between Reason and Will*. Edited by Sinkwan Cheng. Stanford University Press, 2004. pp. 25-45.
- 喜志哲雄「編訳者あとがき」『何も起こりはしなかった—劇の言葉、政治の言葉』喜志哲雄編訳、集英社新書、2007 年、pp. 215-221。